

八方尾根（不帰の嶮）



冬のスポーツのすすめ

長砂 實

スキーシーズンの到来である。冬のスポーツといえばやはりスキーだ。今シーズンの私の主なスケジュールはすでに決まっている。①年末年始の家族スキー（野沢温泉）、②一月の関西勤労協スキーツアー（志賀高原・熊の湯）、③二月のゼミ・スキー（氷の山国際）、④三月の関西大学教員組合スキー（妙高・赤倉温泉）。それぞれに想い出と楽しみがある。

「家族スキー」は二十年ほど前からのわが家の恒例行事である。今年は四人の孫のうち二人の「手ほどき」を楽しんだ。「勤労協スキーツアー」は三年前からの参加だ。今年の目標は今まで正式取得の気がなかった「一級」の資格に挑戦することである。「ゼミ・スキー」はわがゼミの伝統である。三・四年合同で院生も加わる。全員参加が原則。私がヘッドコーチを勤める。おかげで教え方が旨くなった。ズブの初心者も三日間でパラレルにまで引きあげる。「組合スキー」は二十年の歴史がある。これも皆勤。親睦増進が目的だが、個人的には現地コーチから最新の技術を教わるのが嬉しい。ここ数年は参加者の高齢化が目立つのが残念。若い人達の「奮起」を期待したい。

関西大学での私のスキー歴は、八方尾根の黒菱にある「関西大学山の家」に始まる。一九六五年からである。この山の家は素晴らしい。八方尾根は雪質抜群でコースは多彩、全国のスキーヤーが絶賛するスキー場だ。その上あたり千六百メートルの高所に山の家がある。「三百六十度」の景観を居ながらにして満喫できる。とりわけ朝焼けの白馬連峰は見事だ。この八方で私は「足」をみがいた。初期に教えていただいた本学文学部の赤井養光、島田三千男の両先生にはいつも感謝している。当時から山の家の管理人、横山さんは今もお元氣だ。これからもせいぜい利用したいし、皆さんにも利用を奨めたい。

スキーは文句なしに楽しい。直接に自然を相手にする雄大なスポーツだ。雪斜面そのものは静止しているが、こちらの運動につれてそれは絶えず激しく変化する。その変化に瞬時に対応しながら、スピードをコントロールして思い通りのシュプールを描くことを追求する、そこにスキーのだいご味がある。下手は下手なりに楽しめる。アフタースキーもまた良い。温泉と地酒が付録としてあればもう言うことがない。

スキーの上達はそれ自身が楽しみだ。上達の近道はなにか。正規に習うことである。とくに初期の我流は禁物。教わるのと自学自習とを半々にするとよい。書物での理論吸収とイメージ・トレーニングも有効。到達目標を積極的に引きあげていき、いわばらせん階段を昇る気構えをもつことが上達の秘訣だ。同時に、意識的に絶えず基礎技術に回帰することが大切である。また、概して、上達は滑る日数に比例する。

残念ながらスキーシーズンは短い。健康維持の面からもスポーツは本来年間を通してやるべきものだ。スキーと共通の要素をもちしかも年中やれるスポーツはなにか。私の場合それはテニスである。始めて六年になる。独自の楽しみもわかってきた。テニスもまた冬のスポーツのひとつである。

(商学部教授)



本号の発行は、新年も松の内が明ける頃かと思う。性懲りもなく新しい年を迎えるたびに「今年こそは」と念じたくなるのは人情というもの。その際には回顧と反省が伴うはずであるから、己が将来ビジョンに沿って生きざるを得ない。経済界でも例年のように経済予測が企てられる。その多くは、まったくの思い付きでない限り、昨年までの延長線上への外挿か、方程式体系のパラメーターに仮説的な値を与えたシミュレーションであろう。こうした予測は個々の人間が適応すべき環境を予測するための「参照枠」を提供する。しかしながら、現実はいかに本質的な意味において不確実であって、固的な方程式構造を前提してはなかなか捉えきれないというのが真実である。まして、いまは国内外の技術的・経済的・政治的諸要因が複雑に絡みあい、現実には波乱にともなう、また大きく変動している。千里眼も千里を見通すどころか五里霧中の状態。否、一寸先も闇。こんなときには、専門家ならずとも人類悠久の歴史を顧みるにしくはない。「歴史の流るるに身をまかせ、日常レベルの思考様式や思考の枠組みから一時的にも脱し、思考の翼を存分に広げることができる」▼話題の「大國の興亡」の他、「メデリアの興亡」（杉山隆夫著、文藝春秋）、「文明の「血液」——貨幣から見た世界史——」（湯浅起男著、新評論）が最近ではオモシロかった。学生諸君も学年末試験後、新年度までの、あるいはホカボリ社会人になるまでのひとときを、展望のための歴史的回顧に捧げてみてはいかがか。千里眼以上の「社会の目利き」になることは請け合い。（Y・I）

►編集後記◀